岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第188号（2025）105－114

学生による家庭科と他教科の比較を通した教科観の再考

―「中等家庭科教育法」における学習指導要領解説の検討を通して ―

詫間　千晴

本稿では，中等家庭科教員養成課程に在籍する２年生の必修科目「中等家庭科教育法」において，家庭科と他教科を比較（共通点や相違点を整理）する機会を設けることで，受講した学生の家庭科に対する教科観がどのように変容するのかを調査することを目的とした。

その結果，他教科の中学校学習指導要領解説の記載内容から，学生は家庭科と各教科との関連性を認識し，他者の生活に対する価値観や考え方について理解を深めること，個人の生活が社会に影響を与えることについて理解を深めることなど，家庭科の学習が担う役割を新たに認識することができたと推察された。また，授業後の家庭科に対する教科観は，比較対象とした他教科による影響が見られ，「多様な生き方」，「様々な価値観や生き方」，「社会での課題を発見し，改善する力」，「未来の社会をつくる」等の新たな記述が見られた。

Keywords：家庭科教員養成課程，教科観，家庭科，他教科，比較

1　問題の所在と研究の目的

2017，2018年に改訂された小・中学校及び高等学校の学習指導要領の中で，各教科を超えた汎用的資質・能力の在り方が問われるとともに，各教科等の本質的な意義を明確にし，組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくカリキュラム･マネジメントの重要性が示された。したがって，教師自身が，①自己の専攻教科の本質的な意義を理解し追究する能力，②教育課程全体を俯瞰して各教科等の関連性を捉える能力を，併せて身に付けることが必要となる。①の能力については，これまで日本教科教育学会において議論がなされてきており，各教科で「教科の本質」を問う姿勢が見られる[1) 2)]。また，教員養成課程においても，①の能力を向上させる研究は散見される（例えば，島田，2021[3)]，湯口･江尻，2022[4)]）が，②の能力を向上させる具体的な方法は確立されていない。丸山（2015）[5)] は，コンピテンシー・ベイスの教育へと転換している中で，教科の枠を超える現代的課題を探求する「教科をクロスする授業」や「プロジェクト授業」に関する方法の構築こそ，教科教育学が取り組まなければならない研究課題であると述べている。以上のことから，教員養成課程において，各教科の関連性を捉えるとともに，専攻教科の本質的な意義を再考する場の設定が求められていると考えた。

青木（2009，2010）[6) 7)]，永田ら（2004）[8)]，村上･髙橋（2015）[9)] による教員養成における先行研究，R.J.マルザーノ・J.S.ケンドール（2013）[10)] の認知システム「レベル３：分析」における比較のプロセスから，自己の専攻教科の存在意義を改めて探究するとともに，他教科を比較対象として教科間の共通点や相違点を追究させることによって，学生の教科観が深まり，①及び②の能力が向上すると推察した。

森・鈴木（2017）[11)]，森・鈴木（2021）[12)]，詫間・鈴木（2023）[13)] では，「内容教科」に属する家庭科，社会科，理科を比較する方法について検証を行った。それらの結果から，各教科の共通点や相違点を整理する【方法①】，各教科の既存の授業案を検討する【方法②】，共通テーマを設定した各教科の授業案を作成する【方法③】の３つに整理し，中等家庭科教員養成における家庭科と他教科を比較する機会の導入

岡山大学学術研究院教育学域　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１

Reconsidering Students' Views of Home Economics through Comparison with Other Subjects: Through an Examination of the Explanation of the Curriculum Guidelines for "Secondary Home Economics Education"

Chiharu TAKUMA
Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

案を提示した（詫間，2024a）[14]。本導入案は，方法①～③を難易度別に整理し，実施した時期（学年）の適時性等を検討して再設定したものである。しかし，再設定後，それらの効果の検証には至っていない。

そこで，本稿では，教育実習前の生徒の視点と教師の視点が混在した〔深化①〕の段階である，大学2年生を対象とした「中等家庭科教育法」において，家庭科と他教科との共通点や相違点を整理する【方法①】を取り入れることで，受講した学生の家庭科に対する教科観がどのように変容するのかを検証することを目的とした。

２　研究の方法

（１）家庭科と他教科の比較の手順

１）事前課題の提示

2023年度「中等家庭科教育法」の全15回の授業計画を表１に示す。本授業は，全ての回を筆者が担当した。

表１　「中等家庭科教育法」の授業計画

Ⅰ．家庭科の現状と課題 －「学ぶ」側から見た家庭科授業の現実と，家庭科の意味の形成－
第１回　家庭科を学ぶ意味を探る －学習指導要領における家庭科の位置付けと目標－
第２回　人々の価値観及びライフスタイルの変化から捉える家庭科の現状と課題
Ⅱ．学習指導要領に示された家庭科授業づくりの観点
第３回　学習指導要領における家庭科の全体構造と内容構成
第４回　中等教育段階の家庭科授業論の構築の視点
第５回　協力・協働の視点を用いた授業構想
第６回　健康・快適・安全の視点を用いた授業構想
第７回　生活文化の伝承・創造の視点を用いた授業構想
第８回　持続可能な社会の視点を用いた授業構想
第９回　生活事象と視点を活かしたカリキュラムデザイン（１）
第10回　生活事象と視点を活かしたカリキュラムデザイン（２）
第11回　生活事象と視点を活かしたカリキュラムデザイン（３）
Ⅲ．家庭科の学習開発の視座を共有する
第12回　A　家族・家庭生活の教材研究・実践
第13回　B　衣食住の生活の教材研究・実践
第14回　C　消費生活・環境の教材研究・実践
第15回　全体の振り返り

まず，第９～11回の事前課題として，担当教科を決めた後，各教科の中学校学習指導要領解説を読み，①家庭科との共通点を探すこと，②他教科の学習内容と関連づけた家庭科の授業を考えることの２点を提示した。本授業を受講したのは２年生の学生３名であったため，第９回は社会，理科，技術，第10回は保健体育，音楽，美術，第11回は国語，数学，外国語について調査するよう設定した。各回の教科の組み合わせは，詫間（2024b）[15] で示した教科の分類において，類似する教科を３教科ずつ集めて構成した。また，共通点が比較的に見つけやすい教科の組み合わせから実施し，段階的に難易度を上げるよう，課題の提示の仕方を工夫した。この教科の分類については，マッピングを実施した後に，筆者より説明を行った。

２）授業内の学習活動

第９回～第11回は，授業の最初に学生から家庭科と他教科との共通点他教科の学習内容と関連づけた家庭科の授業構想について，調べた内容を発表させた。その後，筆者より他教科の目標，見方・考え方，学習内容等の補足説明を行い，マッピングを実施した。マッピングは，jamboardを用いて実施し，各教科の独自性（黄色），家庭科と他教科の共通点（緑色），家庭科以外の２教科の共通点（水色），４教科の共通点（ピンク）を記入して整理した。また，毎回の授業の終わりに，授業内容に対する振り返りを記述してもらった。

（２）質問紙調査

１）調査対象者

2023年度「中等家庭科教育法（基礎Ⅰ・Ⅱ）」を受講した２年生の学生A及び学生Bの２名であった。なお，社会，音楽，数学を担当した学生Cは，中等家庭科教員養成課程に在籍していないことから，本研究の調査対象から除外した。

２）調査方法

第１回の授業（2023年４月11日）の最初と，第15回の授業（2023年７月25日）の最後に同様の質問紙調査を実施し，事前と事後の記述内容を比較・分析した。調査対象者に対しては，事前の質問紙調査実施時に，本研究の目的，方法等を説明し，同意書に署名をしてもらった。質問項目の詳細を表２に示す。質問１～３は全て自由記述とし，質問１については，「家庭科は＿＿＿＿＿である。」という文章の下線部分に最大で三つまで回答可とした。

表２　質問紙調査の質問項目

質問１	あなたは家庭科にどのようなイメージをもっていますか？
質問２	「家庭科は家庭でも教えられるから，学校教育で必要ないのではないか」という意見に，あなたはどのように答えますか？
質問３	あなたが考える家庭科の「教科の本質的な意義」，「教科の独自性」，「育成する資質・能力」は何ですか？

３　結果と考察

（１）学生が作成したマッピング

第９回～第11回の授業で学生が作成したマッピングを図１～図３に示す。なお，図１，図２の作成

時には，学生Cも参加した。ここでは，主に各教科の共通点に着目して述べる。

図１より，社会，理科，技術，家庭科の４教科の共通点では，「生活に関わることについて学ぶ」という言葉が表出し，「内容教科」，「生活課題教科」として関連の深い社会，理科，技術との共通点を認識できたことがわかった。緑の付箋では，技術との共通点として「環境・社会に配慮し，快適な生活を営む」，社会との共通点として「地域社会に目を向けている」，理科との共通点として「身の回りの現象を踏まえてよりよい生活を創造する」など，各教科の目標に沿った記述が表出した。水色の付箋では，技術と社会の共通点として「技術の革新によって変わる社会の仕組みの変化を捉える」という記述や，技術と理科の共通点として「自然の仕組みを技術に応用する」という記述が見られた。

図２より，保健体育，音楽，美術，家庭科の４教科の共通点として，「実践的･体験的な活動が多い」，「表現する」という言葉が表出した。緑色の付箋では，保健体育と家庭科の共通点として学習内容の関連についての記述が多く，音楽と家庭科では「自己の表現」，美術と家庭科では「色・形・材質の美しさを重視する」など，視点や観点に関する共通点が挙がった。水色の付箋では，音楽と美術の共通点として「芸術に触れる」という記述が挙がった。

図３より，国語，数学，外国語，家庭科の４教科の共通点として，「使うことに意味を見いだす教科」という用具教科の特徴が表出した。家庭科は「用具教科」には属さないものの，学習したことを実生活に活かすという面で共通すると考えたことがわかった。緑色の付箋では，数学と家庭科の共通点として「生活に必要不可欠な部分を学ぶ」，国語と家庭科では「文化を学ぶ」，外国語と家庭科では「多様な価値観を学ぶ」という言葉が表出し，各教科の学習の意義との関連性について考えたことがわかった。水色の付箋では，国語と外国語の共通点として「言語を学ぶ」という記述が見られた。

共通点が比較的に見つけやすい教科の組み合わせから段階的に実施したこともあり，共通点の記述数は図１～図３にかけて減少し，独自性を示す黄色い付箋の記述数は図１～図３にかけて増加した。

（２）学生Ａの教科観の変容

１）事前課題に関する発表内容

学生Ａは，理科，美術，外国語を担当した。学生Ａの事前課題に関する発表内容の概要を表３に示す。

理科では，家庭科の学習内容「B衣食住の生活」と理科の各学習内容との強い関連を認識し，「大地の成り立ちと変化」の内容と関連付けて，「災害から地域を守る」という授業を考案した。本授業の目

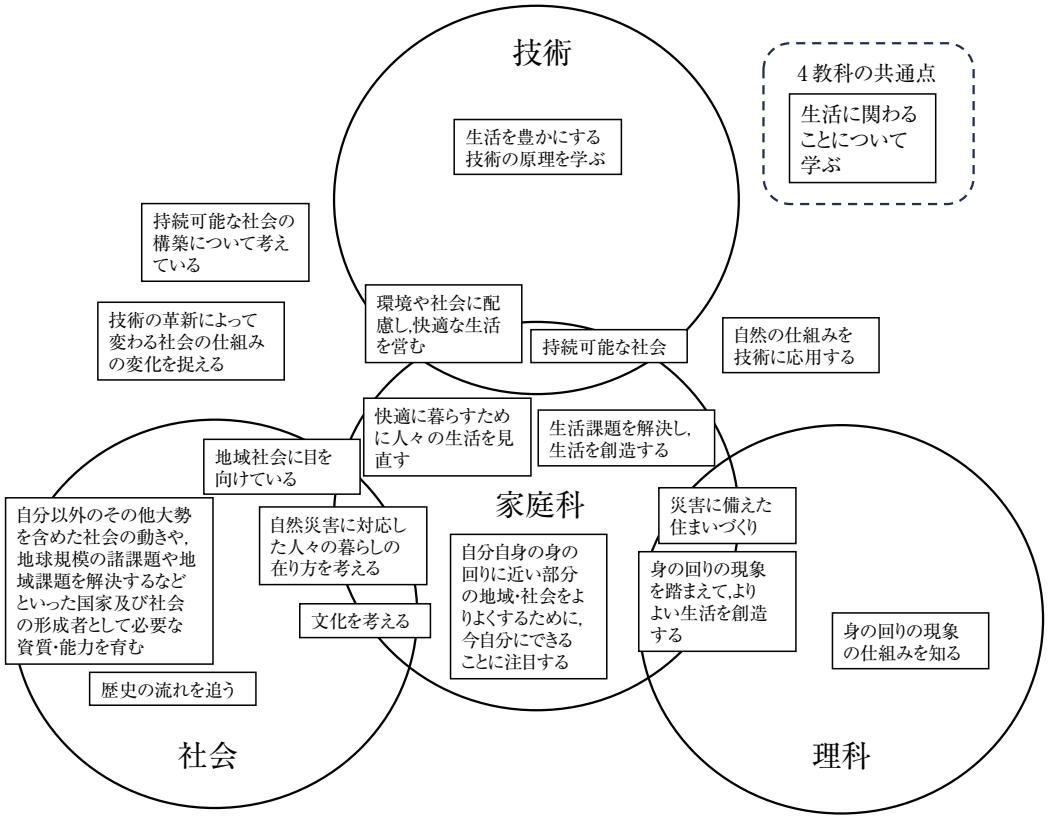

図１　社会・理科・技術との比較

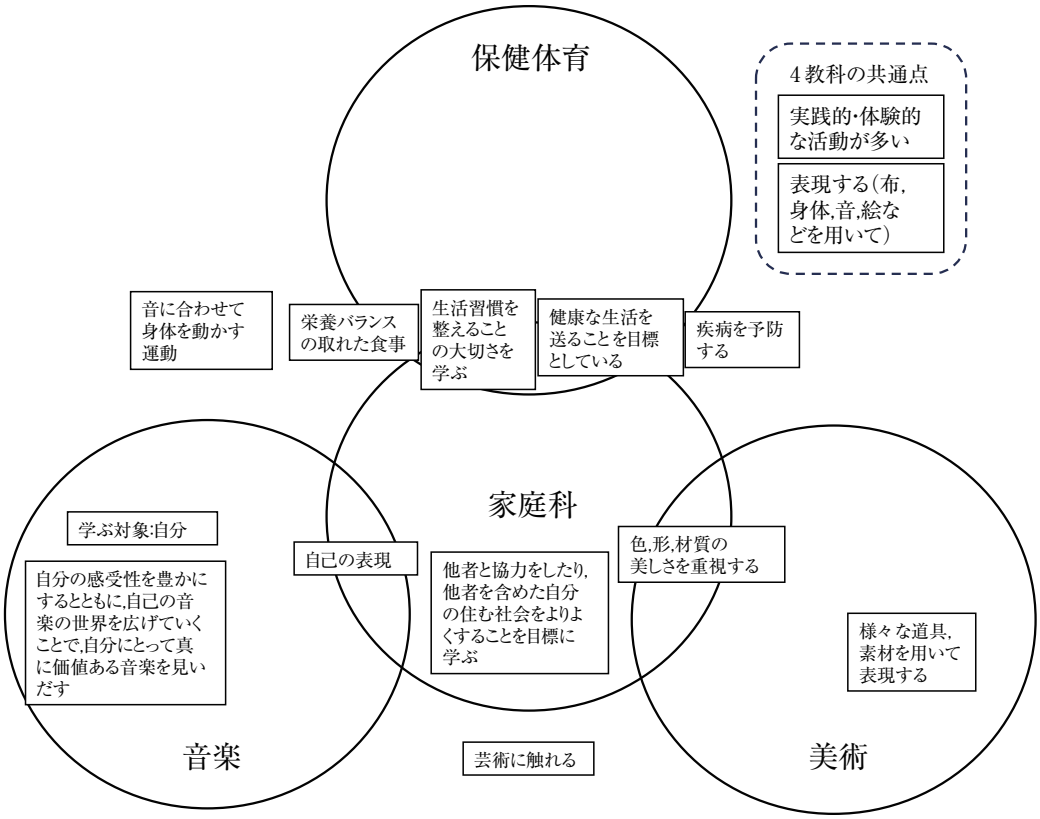

図２　保健体育・音楽・美術との比較

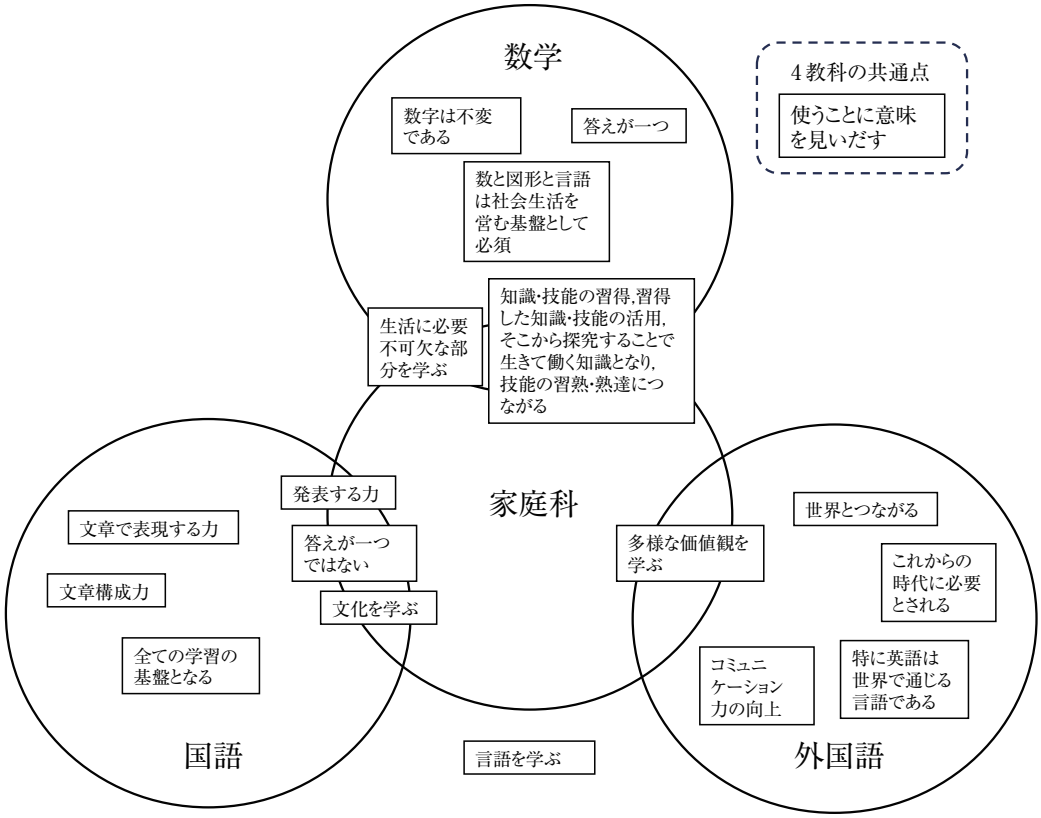

図３　数学・国語・外国語との比較

標として，学生Ａは下記の２点を設定していた。

- 地域に被害をもたらす災害の特徴について知り，身の守り方や，安全な避難方法について考える。
- 家族や地域を守るために，ハザードマップや避難場所の確認をし，災害に備える姿勢を養う。

本授業を行う前に，理科において「大地の成り立ちと変化」を学習していることを想定し，地震や津波が発生するメカニズムを復習する。その内容から，各災害における二次被害の想定をするとともに，家庭での対策や中学生が被災時にできること等を思考させる授業展開となっていた。

美術では，「形や色彩，材料，光などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解すること」という記述と「B　衣食住の生活」との関連を認識し，「目的に合った衣服の選択」という授業を考案した。本授業の目標として，下記の２点を設定していた。

- 目的に合った衣服の選択をすることができる。
- クラスメイトとの意見交流を通して，他者の好み・感覚などの多様な価値観を理解する。

目的に合った衣服の選択では，遊園地に行くとき，暑くなり始めたとき，親戚の結婚式に行くとき等の場面設定をした上で，TPOに応じた着装を描く学習活動を行う。その後，美術で学習した「色」，「形」，「材料」等が人の感情にもたらす効果について復習し，衣服には「個性を表現する」役割もあることを認識させ，自己を表現する着装について思考させる授業展開を考案していた。

外国語では，「我が国の文化や，英語の背景にある文化に対する関心を高め，理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと」と「B　衣食住の生活」との関連を認識し，「外国の文化と日本の文化の違い」という授業を考案した。本授業では，下記２点を目標として設定していた。

- 外国の文化と日本の文化の違いを学び，地域によって文化が異なる理由を考察することができる。
- 多様な価値観に触れ，寛容できる姿勢を養う。

授業展開では，まず，様々な国の衣服，住居，料理の写真のみを見せ（国名の提示はしない），それぞれの写真に対して，どのような気候の地域かを予想させるグループ活動を行う。その後，国名を発表し，各国の生活文化とその特徴を学習する。また，「日本ではなぜ衣食住で『和風』が広く親しまれているのか」についても，日本の気候・風土，歴史によって醸成された生活文化の面から考察し，日本の生活文化・伝統がどのように形成されてきたのかを認識させる活動を設定していた。

また，授業後の振り返りの記述（表４）では，担当した各教科に対して，「理科では，事象の原理を知ることで，家庭科において『なぜこれを学ぶのか』の直接的な理由になると思った」や，「美術におけ

表３　学生Ａの発表内容（概要）

学生 A	学習指導要領解説の中で関連があると考えた箇所	構想した授業案
第９回 理科	身の回りの物質（衣・食）／化学変化と原子・分子（衣・食）／化学変化とイオン（衣・食）／科学技術と人間（衣・食・住）／植物の生活と種類（衣・食）／大地の成り立ちと変化（家・住・環）／自然と人間（環）	B 衣食住の生活 （住生活） 「災害から地域を守る」
第 10 回 美術	p.45「ア　形や色彩，材料，光などの性質や，それらが感情にもたらす効果などを理解すること」 （衣）衣服の選択，衣服がもたらす心理的効果／（食）きれいな盛り付け方／（住）部屋のデザイン，インテリアの選択，置き方	B 衣食住の生活 （衣生活） 「目的に合った衣服の選択」
第 11 回 外国語	p.99「イ（イ）我が国の文化や，英語の背景にある文化に対する関心を高め，理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと」 （衣）世界の民族衣装／（食）世界の食文化，地域の食文化／（住）世界の住居，住居の基本的な機能	B　衣食住の生活 （衣食住生活） 「外国の文化と日本の文化の違い」

表４　学生Ａの振り返りの記述

学生 A	授業の振り返りの記述
第９回 理科	教科ではそれぞれ扱う対象や求める資質・能力が異なるというような特徴があるため，教科等横断的な授業をすることで，知識を補い合ったり，別の視点から捉えてみたり，というように，より幅広く，深い学びにつながることがわかった。自分が担当した理科では，事象の原理を知ることで，家庭科において「なぜこれを学ぶのか」の直接的な理由になると思った。
第10回 美術	今回の題材の教科との関連は，少ししか重なっていなかったり，そもそも取り扱うものの観点やつけたい能力・知識の方向性の違いから，かなり薄かったように感じる。自分の調べた美術では，美術における技術的なものとは異なる，心理的側面に目を向けることで内容を関連づけることができた。
第11回 外国語	国語・英語という「言語を扱う教科」と家庭科の内容の関連性を考えるのは難しかったが，家庭科を学ぶためのツールとして，言語，それを用いたコミュニケーションをとることでより深い学び，能力の獲得につながるのではないかと考えられる。

※本文で引用する部分を一重下線で示す

る技術的なものとは異なる，心理的側面に目を向けることで内容を関連付けることができた」，「家庭科を学ぶためのツールとして，言語，それを用いたコミュニケ―ションをとることでより深い学び，能力の獲得につながる」等の記述が見られた。また，第９回の記述に見られるように，家庭科と他教科を関連づけることで，「知識を補い合ったり，別の視点から捉えてみたり，というように，より幅広く，深い学びにつながる」ということを理解したことがわかった。

以上の発表内容や振り返りの記述より，学生Ａは，他教科での学びを家庭科に活かすことで，生徒が物事を多面的に捉えられるような指導の工夫が可能となることを認識したと推察された。また，特に家庭科の「Ｂ　衣食住の生活」と他教科との関連づけが容易，あるいは適切であると判断したことが明らかとなった。

２）質問紙調査結果

学生Ａの質問紙調査結果を表5に示す。事前調査の質問１「あなたは家庭科に対してどのようなイメージをもっていますか？」では，「将来の生活につながるもの」，「より良い暮らしを創るもの」，「周囲の人々との関係をよりよくするもの」と回答していた。教科イメージとしては，将来や現在の生活を創造し，人間関係を円滑にする働きがあるという印象をもっていたことがわかった。質問２「『家庭科は家庭でも教えられるから，学校教育で必要ないのではないか』という意見に，あなたはどのように答えますか？」では，「より専門的な知識を得たり」，「周りの人と協力することで得られる知識もある」と述べており，他者との協働や知識習得に対する意義を感じていることが見てとれた。質問３「あなたが考える家庭科の『教科の本質的な意義』，『教科の独自性』，『育成する資質･能力』は何ですか？」では，「実生活と密接にかかわる分野の知識を得る」，「生活の質の向上やより良い人間関係の構築」，「普段の家庭での生活に活かせる知識と，実践を混ぜながら得る」，「学んだ知識をどのように生活に生かすかを考える」等の記述が見られ，ここでも，他者との協働や知識習得に焦点を当てていることが明らかとなった。これらの記述から，学生Ａは，家庭科の教科観として，「実生活に結びつく知識の習得」，「他者との協働や人間関係の構築」，「生活における実践力の育成」の３点を強く認識していると考えられた。

一方，事後調査では，事前調査の記述に見られた３点の教科観に加え，質問１では「多様な価値観を学べる」，質問２では「限定的な価値観や知識」，「様々な価値観や生き方」，質問３では「多様な生き方を学び」等，多様な生き方や価値観に関する記述が新たに表出した。この変容は，美術との共通点から，人によって「美しさ」や「よさ」の価値基準が違うことや，それらを表現する際の多様性を認識したこと，また，外国語との共通点から，各国の「生活」に対する価値観や考え方の違いを知り，世界の多様な生活文化や生活習慣について理解を深めることの重要性に気づくことができたためと推察した。また，理科との共通点を活かした授業案では，各地域のハザードマップを確認した上で災害対策を考える等，住む土地によって生活の営みが変わることに着目していることから，人々の「生活」に対して多面的に捉えることができるようになったのではないかと考えられた。

表５　学生Ａの教科観の変容

学生 A		事前調査結果	事後調査結果
質問1		家庭科は<u>将来の生活に直接つながるもの</u>である。 家庭科は自分のより良い暮らしを創るものである。 家庭科は<u>周囲の人々との関係をより良くするもの</u>である。	家庭科は<u>将来の生活に役立つ教科</u>である。 家庭科は<u>人との関わりを豊かにする教科</u>である。 家庭科は<u>多様な価値観を学べる</u>教科である。
質問2		確かに，衣生活や食生活分野は，普段家庭で手伝いをしたり，<u>毎日生活する上で身につく知識</u>もあるかもしれないが，<u>より専門的な知識を得たり，周りの人と協力することで得られる知識</u>もあるため，学校教育で学ぶべきである。	<u>家庭という狭い空間だけで得た限定的な価値観や知識</u>だけでは，社会に出て自立した際不十分であり，「当たり前の生活」が安定して送れなくなる恐れもあることから，小さなズレが大きな問題を生むことにつながる。そのため，<u>様々な価値観や生き方</u>を知るために必要である。
質問3	意義	<u>実生活と密接にかかわる分野の知識を得ること</u>で，生活の向上やより良い人間関係の構築などを目指す	<u>社会との関わりから多様な生き方を学び</u>，よりよい生活を営むための方法について考えられること
	独自性	衣，食，住，経済，家庭など，<u>普段の家庭での生活に活かせる知識と，実践を混ぜながら得ること</u>ができ，その知識を使ってよりよい生活をつくることができるようにする	衣食住といった，<u>普段の生活で必要な技能</u>について学ぶ
	能力	普段の生活から改善点，課題を見つけ，<u>学んだ知識をどのように生活に生かすかを考えることができる能力</u>	健康的かつ社会的な，<u>自立した生活を営むための資質・能力</u>

※事前事後で類似する記述を一重下線，事後で新たに表出した記述を二重下線で示す

これらの結果から，学生Ａは家庭科と理科，美術，外国語との比較を通して，他者の生活に対する価値観や考え方の違いや，その生活がもつ歴史的・文化的背景について理解を深めるという，家庭科の学習が担う一つの役割を新たに認識したと推察した。

（３）学生Ｂの教科観の変容

１）事前課題に関する発表内容

学生Ｂは，技術，保健体育，国語を担当した。学生Ｂの事前課題に対する発表内容を表６に示す。

技術では，家庭科の住生活分野と技術の「Ａ材料と加工の技術」を関連付け，環境に対する負荷を減らすことができる住まい方を「建物の工夫」と「暮らす人々の工夫」の二側面から考えていく授業を考案していた。本授業の目標として，学生Ｂは下記の２点を設定していた。

- 持続可能な住生活を目指して課題とその解決方法を考え，住生活を工夫することができる。
- （建築に関する）基礎的な技術の仕組みについて理解する。

「建物の工夫」としては，天窓や高窓から光を取り入れる，太陽光発電の仕組み等を，「暮らす人々の工夫」としては，電気をつけっぱなしにしない，カーテンをうまく利用して遮光する等の例を挙げ，持続可能な社会の構築という視点から，住生活においてもできる工夫を思考させる授業展開としていた。

保健体育では，保健分野の（１）ア（ウ）と食生活分野の学習との関連付けを行い，運動，食事，休養という健康の三つの柱について，スポーツと食生活の関係から学習する授業を考案していた。本授業の目標として，下記の３点を設定していた。

- 健康の保持増進には，休養および睡眠によって心身の疲労を回復することが必要であることを理解する。
- 健康の保持増進には，年齢，生活環境等に応じた食事，運動，休養および睡眠の調和のとれた生活を続ける必要があることを理解する。
- 食事の量や質の偏り，運動不足，休養や睡眠の不足などの生活習慣の乱れは，生活習慣病などの要因となることを理解する。

授業の導入では，朝食の摂食状況，１日の運動時間および睡眠時間等について生徒に振り返らせ，食事，運動，休養および睡眠の調和のとれた生活を送れているか，自身の生活課題を発見させる。その後，食事摂取基準表を提示し，年齢や運動量に応じた適切なエネルギーや栄養素の摂取量を理解させ，中学生に必要な１日分の食事について思考させる学習展開としていた。

国語では，学習内容の直接的な関わりはなかったものの，国語で培った能力を活かした学習内容を設定する必要があることを認識した。また，国語が，「一人一人の自己形成，社会生活の向上，文化の創造と継承などに欠かせないこと」に関連を見いだしていた。そこで，家庭科においては，地域の食文化につ

表６　学生Ｂの発表内容（概要）

学生Ｂ	学習指導要領解説の中で関連があると考えた箇所	構想した授業案
第９回 技術	p.28「技術に込められた問題解決の工夫について考えること」／p.31「生活や社会，環境との関わりを踏まえて，技術の概念を理解すること」／Ａ 材料の加工と技術 （衣・食・住・消・環）環境・社会に配慮し，快適な生活を営む	Ｂ 衣食住の生活 （住生活） 「持続可能な社会と私たちの住生活」
第10回 保健体育	p.207（１）ア（ウ）「健康の保持増進には，年齢，生活環境等に応じた運動，食事，休養及び睡眠の調和のとれた生活を続ける必要がある」 （食）食事の意義と役割，食事摂取基準	Ｂ 衣食住の生活 （食生活） 「スポーツと食生活の関係」
第11回 国語	p.13「国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことを求めているのは，我が国の歴史の中で育まれてきた国語が，人間としての知的な活動や文化的な活動の中枢をなし，一人一人の自己形成，社会生活の向上，文化の創造と継承などに欠かせないからである」 （食）地域の伝統的な食文化	Ｂ　衣食住の生活 （食生活） 「地域の食文化」

表７　学生Ｂの振り返りの記述

学生Ｂ	授業の振り返りの記述
第９回 技術	私が考えた技術と家庭科の教科横断的な授業には，<u>この２教科だけではなく，理科や社会科からの視点も取り入れることができる</u>ことに気づいた。教科横断的な視点は，カリキュラム・マネジメントを推進していく上でとても重要なものであると思った。
第10回 保健体育	保健体育と家庭科の教科横断的な授業案としては，<u>健康に関することだけではなく，疾病や生活習慣病，生活管理の分野からも考えられる</u>ということに気がついた。音楽と家庭科の共通する分野が少ないことにも改めて気がついた。
第11回 国語	<u>国語は全ての教科の基礎となる力を養うための科目</u>であるため，家庭科との横断的内容も比較的考えやすかった。グローバル化が進んでいる今の世界では，<u>英語との連携を図ることで家庭科にはない新たな視点から捉えることができる</u>と思った。

※本文で引用する部分を一重下線で示す

表８　学生Ｂの教科観の変容

学生Ｂ		事前調査結果	事後調査結果
質問1		家庭科は将来役に立つ教科である。 家庭科は実生活に活かせる教科である。 家庭科は生きるために必要なものである。	家庭科は日常生活と深く結びついている教科である。 家庭科は他教科と密接な関係を持っている教科である。
質問2		・調理実習や被服製作など，複数人で協力して作業することでしか得られない発見や視点がある。 ・友達と意見を共有しながら学んでいくことに意味がある。 ・家庭では人によって教える内容に差がある。	調理実習や被服製作等の実践的な活動やグループ活動を通して，友達と協力したり，協調性を身につけたりすることができるため，家庭のみでは身につけることのできない力を学校教育では補うことができる。また，学校現場では，友達の意見を聞いて自分の考えを深めたり，新たな発想が生まれたりすることから，刺激をもらえる。
質問3	意義	生きる力を身につける	家庭生活で必要な力を身につけ，社会での課題を発見し，改善に向かう。また，生活を振り返って創造し，未来の社会をつくる
	独自性	学んだ内容を実生活と結びつけ，活かすことができる 生徒個人個人の生活に触れ，実践的な授業ができる	実生活と深く結びついている教科であるため，身につけた知識・技術を日常で活かすことができる
	能力	・広い視野を獲得し，主体的な課題解決力を身につける ・人々がもつ生活に対する多様な価値観を理解する	家庭生活で必要な知識・技術の習得。未来の社会を担っていく一員として，社会での課題を発見し，改善する力

※事前事後で類似する記述を一重下線，事後で新たに表出した記述を二重下線で示す

いて学び，その食文化を継承するための給食献立を提案し，提案文を書いて発表するという授業を考案した。本授業の目標として，下記の２点を設定していた。

- 地域の食材の種類と特徴を理解する。
- 地域の食文化を調査し，それらを活かした給食献立を提案することができる。

授業の導入では，現在の給食献立にどのくらい地域の食材が使われているかを確認し，地域の食文化を調べる活動を行う。その後，グループに分かれて，これまで学習した食品摂取量の目安も踏まえて，地域の食文化を活かした給食献立を思考し，提案文を作成する授業展開としていた。

また，振り返りの記述（表７）では，「健康に関することだけではなく，疾病や生活習慣病，生活管理の分野からも考えられる」のように，発表内容以外の関連づけについても認識したことがわかった。また，第９回の「この2教科だけではなく，理科や社会科からの視点も取り入れることができる」や，第11回の「国語は全ての教科の基礎となる力を養うための科目」，「英語との連携を図ることで家庭科にはない新たな視点から捉えることができる」という記述から，学生Ａ，学生Ｃの発表内容やマッピングを通して，自身の担当した教科以外の教科との共通点や，家庭科以外の教科同士の関連性も見いだすことができたと考えられた。

以上の発表内容や振り返りの記述より，学生Ｂは家庭科においても，他教科の見方・考え方を活かすことで，生徒が物事を多面的に捉えられるようになることを理解したと考えられた。また，家庭科とその他の1教科との関連性だけではなく，学校教育全体を通した学びをデザインすることの重要性を認識することができたと推察された。

２）質問紙調査結果

学生Ｂの質問紙調査結果を表６に示す。事前調査の質問１では，「将来に役立つ」，「実生活に活かせる」，「生きるために必要」等の，有用感や実生活に活用可能なイメージを家庭科に抱いていることがわかった。質問２では「複数人で協力して作業することでしか得られない発見や視点」，「友達と意見を共有しながら学んでいくこと」，「家庭では人によって教える内容に差がある」等，学生Ａと同様に，他者との協働や家庭環境による差異に着目している様子がうかがえた。質問３では，「生きる力を身につける」，「学んだ内容を実生活と結びつけ，活かす」，「実践的な授業」，「主体的な課題解決能力を身につける」，「生活に対する多様な価値観を理解する」等の記述が見られ，実践的・体験的な授業を行い，生徒が実生活を見つめ，生活課題を解決していくことに教科の特性を感じていることが明らかとなった。これらの記述から，学生Ｂは，家庭科の教科観として，「実生活への有用感」，「他者との協働や人間関係の構築」，「生活における課題解決能力の育成」の３点を強く認識していることが推察された。

一方，事後調査では，事前調査で記述のあった３点の教科観に加え，質問１では「他教科と密接な関係を持っている」，質問３では「社会での課題を発見し，改善する力」，「生活を振り返って創造し，未来の社会をつくる」，「未来の社会を担っていく一員として」等の，他教科との関連や社会形成に関する記述が新たに表出した。この変容は，第９回の授業において，社会，理科，技術との比較を行った際に，他教科の学習内容に対する理解の深まりから，個人の生活が社会につながっていること，社会に影響を

与えることへの認識を深めることができたためと推察した。特に，技術の「A材料と加工の技術」における「ア　生活や社会, 環境との関わりを踏まえて，技術の概念を理解すること」と，家庭科の「C　消費生活・環境」における「ア　消費者の基本的な権利と責任，自分や家族の消費行動が環境や社会に及ぼす影響について理解すること」という記述に関連性を見いだし，生活者自身が，家庭生活における技術活用を理解し，一人ひとりが意識して行動することで，持続可能な社会の実現を目指すことができることを認識したと考えられた。

4　総括と今後の課題

本稿では，教育実習前の生徒の視点と教師の視点が混在した〔深化①〕の段階である，大学２年生を対象とした「中等家庭科教育法」において，家庭科と他教科との共通点や相違点を整理する【方法①】を取り入れることで，受講した学生の家庭科に対する教科観がどのように変容するのかを検証した。

中等家庭科教員養成課程に在籍する２名の学生は，他教科の学習指導要領解説の記載内容から，家庭科と各教科との関連性を認識し，教科等横断的な授業設計を行うことで，生徒が物事を多面的に捉えられるような指導の工夫が可能となることを理解したと考えられた。また，授業前後の学生の家庭科に対する教科観の変容では，他者の生活に対する価値観や考え方について理解を深めること，個人の生活が社会に影響を与えることについて理解を深めること等，学校教育において家庭科学習が担う役割を，新たに認識することができたと推察された。

その他の成果として，学生A，学生Bが2024年度の教育実習で考案した授業では，他教科での学習を活用した授業展開を実践していた。具体的には，家庭科の中学校２年生を対象とした「B　衣食住の生活」の「加工食品の特徴」に関する授業において，授業の導入に，豆乳ににがりを加えて電子レンジで加熱し，豆腐を生成する簡易実験を行っていた。その後，理科での学習を踏まえて，にがりは塩化マグネシウムや硫酸カルシウムを主成分としていることや，大豆たんぱく質の分子構造に水中でマイナスの電荷を帯びるカルボキシル基（-COOH）が含まれており，にがりに含まれるMg^{2+}やCa^{2+}イオンが加えられると電気的に結合し，たんぱく質が固まることで豆腐となることを説明していた。また，大豆からなる加工食品を図で示す大豆マップを作成する際には，小学校３年生の国語の授業で扱った「すがたを変える大豆」の一部を挙げ，加工する目的や加工方法について連想できるような指導の工夫を行っていた。このような授業展開や指導の工夫がみられたことも，２年次の「中等家庭科教育法」において，家庭科と他教科との共通点を認識したことによるものと考えられた。

本調査の課題として，次の２点が挙げられる。第一に，担当しなかった教科に対する理解が十分に図れなかったこと, 各回３教科ずつに区切ったことで，教育課程全体を俯瞰して捉えられなかったこと等の授業展開に関する課題である。第二に，家庭科と他教科の関連性に対する認識がどの程度深まったのかを測る手段に関する課題である。学生Bの記述から，担当外教科への理解の深まりや，カリキュラム・マネジメントの重要性を認識した様子もうかがえたが, その具体に関する記述は見られなったことから，一定の効果に留まったと推察された。これらの課題に対しては，３教科ずつに区切った後，再度，全ての教科を概観して比較する，家庭科と他教科の関連性に対する認識の深まりを測る指標を作成する等の改善策が考えられる。また，本調査の限界として，中等家庭科教員養成課程に在籍する学生を対象としたため，調査対象者が２名となり，限定的な結果となったことが挙げられる。学年ごとに段階を設定して実施するため，調査対象者を増やすことは困難であるが，授業実践を積み重ねることで，調査結果を蓄積していきたいと考える。

今後は，これらの成果と課題を踏まえ，家庭科と他教科を比較する，より効果的な手順や方法を検討していきたい。

引用参考文献

１）日本教科教育学会編（2015）『今なぜ，教科教育学なのか―教科の本質を踏まえた授業づくり―』文溪堂

２）日本教科教育学会編（2020）『教科とその本質―各教科は何を目指し, どのように構成するのか』教育出版

３）島田功（2021）「算数科目標論についての考察：算数科が目指す人間像と資質・能力とは何かを中心にして（特集　教科目標論）」『日本体育大学大学院教育学研究科紀要』4 (2), 265-284.

４）湯口雅史・江尻沙和香（2022）「体育科授業論：教科の本質と運動の見方･考え方に着目して」『鳴門教育大学研究紀要』37, 298-312.

５）丸山真司（2015）「第４章　第４節　これからの教科教育学にはどのような課題があるか」日本教科教育学会,『今なぜ，教科教育なのか―教科

の本質を踏まえた授業づくり―』文溪堂, pp.116-117.
6）青木幸子（2009）「家庭科教員養成における探究学習と力量形成：課題認識と教科観の形成」『東京家政大学研究紀要　1　人文社会科学』49, 9-19.
7）青木幸子（2010）「家庭科教員養成における探究学習と力量形成(2)課題認識と教科観の形成」『東京家政大学博物館紀要』15, 55-72.
8）永田智子・鈴木真理子・中原淳・西森年寿・笠井俊信（2004）「CSCL　環境による異教科領域間交流が教員養成系大学生に及ぼす学習効果」『日本教育工学会論文誌』28, 5-8.
9）村上陽子・髙橋智子（2015）「学校教員養成課程における教科連携による授業実践の試み（no.6）図画工作科・家庭科における連携授業の実践と評価」『静岡大学教育学部研究報告　教科教育学篇』46, 163-179.
10）R. J. マルザーノ・J. S. ケンドール（2013）『教育目標をデザインする授業設計のための新しい分類体系』北大路書房.
11）森千晴・鈴木明子（2017）「中等家庭科教員養成課程における異教科間交流がもたらす学生の家庭科観の変容」『日本家庭科教育学会誌』60 (3), 113-124.
12）森千晴・鈴木明子（2021）「中等家庭科教員養成における教科観構築のための方略―３教科の模擬授業への参加による教科観の変容―」,『日本教科教育学会誌』44 (3), 53-63.
13）詫間千晴・鈴木明子（2023）「他教科との比較による教科観の深化を促す教員養成系大学院における授業の効果―大学院生時及び教員４年時の家庭科に対する教科観の分析より―」『日本教科教育学会誌』46 (1), 27-37.
14）詫間千晴（2024a）「家庭科教員養成課程における教科観の深化に関する研究―家庭科と他教科を比較する機会の導入―」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』187, 101-110.
15）詫間千晴（2024b）「他教科の知見を取り入れた家庭科授業設計の提案―教科の分類及び背景学問にみる家庭科の特性から―」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』186, 69-78.